

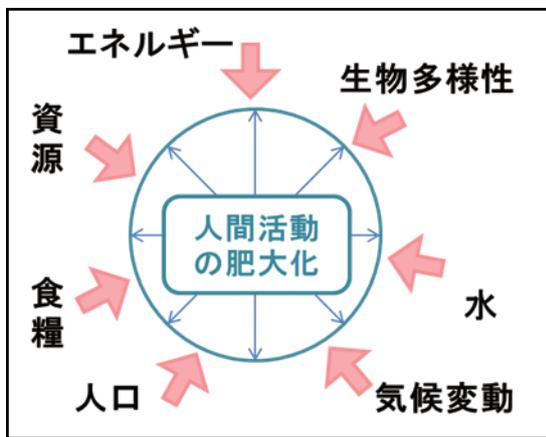
Title	心豊かな暮らし方の伝承を促進する要因に関する研究
Author(s)	松田, 雪妙; 古川, 柳蔵
Citation	年次学術大会講演要旨集, 30: 986-988
Issue Date	2015-10-10
Type	Conference Paper
Text version	publisher
URL	http://hdl.handle.net/10119/13440
Rights	本著作物は研究・技術計画学会の許可のもとに掲載するものです。This material is posted here with permission of the Japan Society for Science Policy and Research Management.
Description	一般講演要旨

心豊かな暮らし方の伝承を促進する要因に関する研究

○松田 雪妙, 古川 柳蔵 (東北大学大学院)

1. 背景

現在、地球環境問題の原因について様々な議論がなされている。IPCC 第5次評価報告書によれば、地球温暖化の主たる要因は人間活動であった可能性が極めて高いとされており、石田ら¹⁾は、エネルギー、生物多様性、水、気候変動、人口、食糧、資源という7つのリスク(図1)を地球環境問題であるとした上で、それらの問題が発生した要因は、人間活動の肥大化であると述べている。

図1 肥大化する人間活動と環境リスク¹⁾

そして、今後も現在の様な大量生産・大量消費・大量廃棄の過程を伴う人間活動の肥大化が進行すれば、上記のリスクは益々増大し、私たちの暮らしは環境からの様々な制約を受けると同時に、暮らしの基盤を支える経済活動や社会システムが根底から崩れることが予想される。これを阻止するためには、肥大化する人間活動のスピードを緩めることが必要条件ではあるが、現在の生産・消費活動を単純に縮小、停止することは難しい。なぜならば、人間には一度手に入れた利便性を手放すことができない生活価値の不可逆性²⁾が存在するためである。私たちが今後求めていくべきは、単純に人間活動を縮小、停止する暮らし方ではなく、心の豊かさが担保されながらも低環境負荷な暮らし方であると言える。加えて、制約下で心豊かに暮らすための知恵、技術、自然資源、ひいては心豊かな暮らし方を後世へ伝承していくこともまた重要であり、それを達成して初めて「持続可能な社会」が実現されたとと言える。

「伝承」に関する研究は、社会科学分野や教育分野など様々な方面で行われている³⁾⁴⁾⁵⁾。戦前から存在した様々な伝承はいずれも、戦後の交通網の発達や核家族化、便利な製品やサービスの普及など、高

度経済成長に端を発する社会構造の変化や暮らしの変化が要因となって、急速に衰退しているという点で共通している。これは、日本の高度経済成長期に導入された新しい動力や技術が、暮らしの中の「不便さ」の解消を次々と実現する一方で、暮らしを支えてきた人々の力や知恵を不要のものとし、それらが衰退すると同時に暮らしの中の伝承の仕組みも失われていったと考えることができる。

また、制約下の暮らし方に着目した研究としては、評価グリッド法と因子分析を用いて将来の環境制約下におけるライフスタイルの社会受容性を高める40の評価項目の導出を行った瀧戸らの研究⁶⁾や、同様の手法を用いて、ワークスタイルの社会受容性を高める評価項目の導出を行った武田らの研究⁷⁾が挙げられる。また小川⁸⁾は、上記の瀧戸らの研究結果に改良を加え、ライフスタイルの社会受容性と心の豊かさの関係に着目し、同様の手法で70の心の豊かさの評価項目を導出した(表1)。

表1. 心豊かなライフスタイルの70の評価項目⁸⁾

1.無駄なものがない	26.マナーを身につける	51.価値観が多様になる
2.手間がかからない	27.受け継がれている	52.知識が深まる
3.金がかからない	28.文化が守られている	53.人間的に成長する
4.時間がかからない	29.人と交流する	54.教育により
5.効率的である	30.互いに助け合う	55.可能性が広がる
6.楽である	31.人と分け合う	56.自由度がある
7.技術が発展する	32.思いやりがある	57.ゆとりがある
8.新規性がある	33.人のためになる	58.流行にのる
9.賞が上がる	34.気持ちを人と共有する	59.自分の好みに合う
10.欲しい物や情報が手に入る	35.人に思いや情報が伝わる	60.貧乏感がある
11.物を作る・手入れをする	36.周囲が寛容である	61.優越感がある
12.物への愛着がわく	37.人に評価される	62.生活が守られている
13.物・食べ物を大切にす	38.自分の個性を出す	63.プライバシーがある
14.食べ物がおいしい	39.役割がある	64.平等である
15.自然の変化に合わせる	40.主体性がある	65.安心する
16.自然を感じる	41.知恵を活かす	66.バランスが取れている
17.畏敬の念がある	42.自立している	67.気持ちが良い
18.故郷がある	43.挑戦する	68.楽しい
19.家族とのつながりがある	44.張り合いがある	69.心が躍る
20.昔を思い出す	45.やりがいがある	70.活気がある
21.子どもの声が聞こえる	46.自信を持つ	
22.地球環境に良い	47.充実感を得る	
23.清潔である	48.メリハリがある	
24.健康的である	49.刺激がある	
25.規則正しい	50.色々な経験をする	

上記の70の評価項目の内の一つに、「受け継がれている」という、「伝承」に関わる項目が設定されている。本研究ではこの項目に着目し、伝承を促進する要因について分析することにした。

一方、「心豊か」という言葉が指す事象の範囲は個人の主観的価値観に大きく委ねられる特性上、定量的評価や一般性を持たせる定義づけが困難であるとされながらも、心の豊かさの構造解明を試みる研究によって成果が蓄積されている⁹⁾¹⁰⁾¹¹⁾。しかしながら、未だ標準化はなされていない。本研究で用いる「心豊か」という言葉は、小川の研究で示された70

の要素を含む暮らしの中で、生活者自身が認知するポジティブな心的状態であると定義づける。

2. 目的

本研究では、制約下での心豊かな暮らし方の伝承が日常生活の中で行われることを目標に、伝承を促進する要因を明らかにすることを目的とする。

3. 仮説

安田¹²⁾は自然環境がその土地に暮らす人の価値観に影響を及ぼすことを示唆し、林¹³⁾は、自己に関する様々な価値観は属する集団と密接な関係にあることを示している。以上より、周囲の自然や人などの環境と、そこに暮らす人の価値観には何らかの関係性があり、その価値観の違いが、伝承に対する意識の差を生むのではないかと考えた。

4. 方法

小川の研究で導出された、低環境負荷で心豊かなライフスタイルの70の評価項目を用いて分析を行う。小川の研究では、70の評価項目一つ一つに対して「心豊かであるかどうかを判断する上でどの程度重要であると思うか」を5段階評価で回答させるwebアンケートで、合計2,000サンプルを収集している。また、居住都道府県を併せて回答させていることから、暮らす環境と価値観の関係を明らかにしようとする本研究の趣旨に適したデータであると考えられる。

このアンケート調査で得られた結果をもとに、「高齢者率」、「人口密度」、「森林率」という自然や人に関する切り口から分析を行った。上記3種類それぞれについて47都道府県の序列を平均値で二分し、一方の都会的特徴を持つ地域群をA群、もう一方の田舎的特徴を持つ地域をB群と名付けた(表2)。

表2. A群, B群の区分基準

	A群(都会的地域)	B群(田舎的地域)
高齢者率	平均値よりも低い	平均値よりも高い
人口密度	平均値よりも高い	平均値よりも低い
森林率	平均値よりも低い	平均値よりも高い

その後、A群に属する地域で暮らしている回答者による回答の平均値と、同様にB群の平均値を算出し、統計ソフトSPSSを用いて各群の平均値の差を算出(A群の平均値-B群の平均値)した。さらに、上記3種類の全てにおいてA群に属する地域を「高齢・人口・森林」のA群、同様に全てにおいてB群に属する地域を「高齢・人口・森林」のB群と名付け、これについても同様に平均値の差を算出した。

ここで、47都道府県の中には、東京、大阪、神奈川など、生まれ育った環境の異なる人々が混在する地域が含まれているため、それらの地域を含む場合の平均値の差の比較と、含まない場合の平均値の差の比較の両方について分析する方針とした。尚、上記の様な地域の選定基準として、平成25年総務省調査によって人口が「社会増加」している地域を対象としたところ、東京、神奈川、千葉、埼玉、愛知、宮城、滋賀、大阪、福岡、沖縄の10地域が該当した。生まれ育った環境の異なる人々が混在する地域を含

めない場合は、上記10地域を除外して分析を行った。

表3. 有意差が生じた評価項目(社会増加地域を含まない)

	70項目中有意差が生じた項目数	「受け継がれている」の有意差	「受け継がれている」の平均値の差
高齢者率	3	有意差あり	0.151
人口密度	1	×	—
森林率	0	×	—
高・人・森	2	有意差あり	0.196

表4. 有意差が生じた評価項目(社会増加地域を含む)

	70項目中有意差が生じた項目数	「受け継がれている」の有意差	「受け継がれている」の平均値の差
高齢者率	4	×	—
人口密度	5	×	—
森林率	3	有意差あり	▲0.095
高・人・森	4	×	—

5. 結果

社会増加をしている地域を含まない場合(表3)、A群の平均値からB群の平均値を差し引いた時、70項目中有意差が生じたのは、「高齢者率」で3項目、「人口密度」で1項目、「森林率」で0項目、「高齢者・人口・森林」で2項目であった。そのうち「高齢者率」と「高齢者・人口・森林」においては、「受け継がれている」という伝承に関わる項目で有意差が生じた。それぞれの平均値の差は、「高齢者率」が0.151ポイント、「高齢・人口・森林」は0.196ポイントであった。

一方、社会増加をしている地域を含む場合(表4)、A群の平均値からB群の平均値を差し引いた時、70項目中有意差が生じたのは、「高齢者率」で4項目、「人口密度」で5項目、「森林率」で3項目、「高齢者・人口・森林」で4項目であった。そのうち「森林率」においては、「受け継がれている」という伝承に関わる項目で有意差が生じた。平均値の差は、マイナス0.095ポイントであった。

6. 考察

以上の結果から、心の豊かさの評価項目は70項目設けられているにも拘わらず、暮らす地域の人や自然などの環境から受ける影響という観点から比較をすると、影響を受ける項目と受けない項目が存在し、ほとんどの項目で影響を受けないことが分かった。そして、有意差が生じたわずか数項目のうちの1つに「受け継がれている」という伝承に関わる項目が含まれていたことから、人や自然などの環境が、そ

の土地に暮らす人々の伝承に対する価値観に影響を及ぼすことが示唆された。

社会増加をしている地域を含まない分析（表 2）では、生まれてからずっと同じ地域に暮らしていることによる影響が表れているとみられ、「高齢者率」の高低が、人々が持つ「伝承」に対する価値観に影響しており、高齢者率がより低い地域の方が伝承を促進させやすく、逆に、高い地域の方が伝承を促進させにくいと考えられる。また、「高齢者・人口・森林」で比較した場合も有意差が生じており、「高齢者率」単独の場合よりも平均値の差が開いていることから、生まれ育った地域で暮らし続けている人々の「伝承」に対する価値観は、「森林率」もしくは「人口密度」は単独で影響はないが、森林率と人口密度の両方の影響がある場合に、伝承に関する価値観に違いを生じさせると考えられる。

一方、社会増加をしている地域のほとんどは A 群に属しており、サンプル数も多いため、社会増加をしている地域を含む分析では、社会増加をしている地域とそれ以外の地域の比較分析をしている状態に近い結果が得られる。社会増加をしている地域を含む場合は、含まない場合に比べて 70 項目中有意差が生じた項目の総数が多かったが、「受け継がれている」という項目で有意差が生じたのは「森林率」のみである。この結果から、生まれ育った環境に拘わらず、現在暮らしている環境における森林率の高低が、そこに暮らす人々の「伝承」に対する価値観に影響を及ぼしており、森林率がより高い地域の方が伝承を促進させやすく、逆に、低い地域は促進させにくいと考えられる。

参考文献

- 1) 石田秀輝・古川柳蔵 2014. 地下資源文明から生命文明へ 人と地球を考えたあたらしいものつくりと暮らし方のか・た・ち—ネイチャー・テクノロジー—. 東北大学出版会.
- 2) 石田秀輝 2009. 自然に学ぶ粋なテクノロジー なぜカタツムリの殻は汚れないのか. 化学同人.
- 3) 桂 博章 2007. 芸能の保存と伝承について—秋田県仙北市角館を例に—. 秋田県教育文化学術部研究紀要 人文科学・社会科学部門 62 : 29-36.
- 4) 初沢敏生 2002. 山形市平清水陶磁器産地の存続基盤. 福島大学教育学部論集 社会科学部門 70 : 25-33.
- 5) 片田敏孝・浅田純作・及川 康 2000. 過去の洪水に関する学校教育と伝承が住民の災害意識と対応行動に与える影響. 水工学論文 44:325-330.
- 6) 瀧戸浩之 2011. 低環境負荷なライフスタイルの評価構造と社会的受容性に関する研究.
- 7) 武田 誠 2013. 環境配慮型ワークスタイルの社会受容性及び評価構造に関する研究.
- 8) 小川敬輔 2015. 心豊かな暮らしのかたちの構造分析とテクノロジー評価.
- 9) 色川卓男 2004. 「女性の幸福感はどう変化しているか」樋口美雄・太田清・家計経済研究所編『女性達の平成不況—デフレで働き方・暮らし方はどう変わったか』, 日本経済新聞社 261-282.
- 10) 白石 賢・白石小百合 2006. 幸福度研究の現状と課題—少子化との関連において—. 内閣府経済社会総合研究所 No.165.
- 11) 林 良嗣・土井健司・杉山郁夫 2004. 生活質の定量化に基づく社会資本整備の評価に関する研究. 土木学会論文集 751:IV-62,55-70.
- 12) 安田喜憲 2006. 文明の風土を問う. 麗澤大学出版会.
- 13) 林 伸二 2000. 組織心理学. 白桃書房. 28-36.